

●「北斗」(愛知県) 547号・548号

547号「捜査二課」(棚橋鎗代)は、警察の取り調べが強いリアリティをもって迫ってくる。この強烈な迫真性は、おそらく経験に基づいているのだろうが、警察の取り調べの一面を確かに切り取っている。全体が過去を想起する形になっていて、それが時間的隔たりのうちにオペラートされてしまっているのが惜しまれるが、取り調べの場面は強烈に残る。文学作品としての形にはなりにくいが、そのシーンはいつまでも実生活のなかの一つの体験として読み手の中に刻まれる作品である。

548号「カプセル・タイム」(大西亮)は狭い空間に閉じこもる習癖のある男の物語で、現代の個の形を、閉じこもる小空間への偏執として展開していくところに強く引きつけられる。閉所への好みが高じて、カプセルを自分でわざわざ特別注文し、生息空間としてそこに閉じこもるが、最後はその卵カプセルに逆に閉じ込められることになる。内鍵の暗唱番号を忘れて、死の恐怖と予感とともに孵化をなお夢見るところで終わっている。人間には、たしかに狭い所に閉じこもりたい子宮回帰のような願望があるのかもしれない、他者との軋轢がより過重になっている現在、外部を遮断して個の殻のなかに閉じこもってじっとしていたい、個の癒しのような願望もあるのかもしれない。この小説は現代のなかに傷つきやすい個のありさまを一つの象徴として浮かび上がらせてくれる。途中やや冗漫になっている部分もあるが、閉じこもり願望への現代の一面をよく表すことに成功している。付記は余計だったが、優れた作品である。

清水信氏の「土曜会50周年」は、半世紀の継続の軌跡が、一つの王道を表す厚みを感じさせる。中部地方の今日の同人雑誌の隆盛はこうした厚みの上に成り立っていることを実感させる。人間の行為の積み重ねの真の輝きを、静かなあたたかい土壌として感受させられる回想である。

●「米子文学」(鳥取県) 53号

「米子文学」には、同人諸氏が書くことを心から楽しんでる様子が伝わってくる。あまり作品の形や細部にこだわらず、奔放に筆のおもむくままに書き綴っている喜びが伝わってくる。こういうあり方も文芸を樂しむ一つの態度であろう。こだわりの捨てたおらかな姿勢は、同人会のあたたかさ、和やかさも滲んでくるようだ。

「余命」(野坂喜美)は脳梗塞によって夫婦を振り返るストーリーだが、その性の振り返りもおおらかで微笑ましい。それが脳梗塞やポリープの老いの影をも吹き飛ばしている。この姿勢は「そんな蝶なんて」(高橋亮)にも見えるし、「大物」(拝藤昇一)にも感じられる。「大物」の素朴な構成は、ここまで来ると逆にぶつ切りの肉料理を鍋ごと出されたような快感もある。

この同人誌には連載が多いのも、書くことを楽しんでいることの表れだろう。巻頭の「大いなる懐に抱かれて」(むとう都真子)、「理想郷」(井畑美代子)、さわやかな剣道修行の青春を描いた「水色の季節」(南家久光)、「ホトトギスと疑惑」(能登路亨)などゆつたりとした筆が感じられる。

エッセイはバラエティに富んでいて豊かである。「葦のズイから中国のぞく」(廣瀬度一郎)は一つの文化考察を味よく練り広げていて、おもしろい。「マージャン」(先生)の項目など詳細でかつ目を開かれる。「オーローラを求めて」(中本从江)は、ツアーとはいえず貴重な体験。

一昔前なら日本人にはとうていできない体験が、その気になれば得られる時代。この感動を大切にし、こうした文章にして知らせてほしい。

歴史評伝「日野郡生まれの志士／富田織部」(森谷肇一郎)もよく調べてあって、地元でなければ書けないきめ細かい筆致で、幕末の日本の政治の動きとよく重ねて一人の志士の像を浮かび上がらせている。地

味だが、こういう文章は一つの文化財産として蓄積されていくべき価値も有している。大事にしてもらいたい。

●「九州文学」(福岡県) 523・524号

新編集長波佐間義之氏を中心とする第七期という新体制での一号・二号で、火野葦平をはじめ芥川賞・直木賞受賞作を数多く生み出した伝統はまだまだ息づいている。二号三五六ページは商業文芸誌にもひけをとらないポリウムで、内容も充実している。特に「どくだみ」(波佐間義之)はいい。詩のカルチャーセンターで主人公の陽一と親しくなる、和江という主人公が、鮮烈。恋愛ストーリーの背後をカネミ油症事件が広がっていく。黒い皮膚で産まれる「コーラベビー」の話や、その薬のための「どくだみ」のにおいが自然にストーリーに流れ込み、素直な筆致が主人公の素朴さとマッチして、しだいにカネミ油症事件の深刻な実態が暴かれていく。企業の公害問題を事件としての社会的広がりから追及するのではなく、副主人公の女性の生身と生存を通して描く文学の手綱を最後まで引き締めている点は評価できる。肉体を許さなまま続く関係は、「カネミに殺されたのよ」「あたしも油症二世なのよ」という告白の夜初めて結ばれることになるが、油症による性的未熟をさらけ出すことになるその夜できごとから、一転して和江は失踪し、やがて自殺死体として陽一の前に現れる。両親も油症事件で死に、墓も持てない和江の骨を、細かく砕いて自殺した山の斜面のどくだみの草の上に散骨するラストシーンも秀逸である。文章密度はもう一つの感だが、内容の重さと人間の描き方の的確さを称揚したい。

「水、ぬるむ」(田部浩二)は友人の住居が人手に渡ることから掘り起こして、娘のマンションの買い替えをめぐって見えてくるパブル期の経済喪失感を描き出している。「年寄りには金持ちだ、役に立たない金を老人は死蔵している、もったいない、少しはがしてやれ、それで振り込め詐欺、信用取引、まんまと裸にす

る」という捉え方は、一つの真実を突いている。こういう素材は小説にするには難しいが、よく作品化している。そのことからかこの文章も情緒を抜きにしてステップを踏むような早い足取りで進んでいく空洞感が否めないが、逆に言えばバブル崩壊や財産喪失というテーマには合っているのかもしれない。もう一つ付け加えたいのは、老人はこのようなお金持ちばかりではなく、むしろ厚生年金を受けていないような老人は極貧で、老年になって貧富の差は目を覆いたくなるほど激しくひろがっているのが日本の現状であるということだ。

● 巻末の古代史考「大國主命の出雲征臣」(神尾正武)

は壮大な古代ロマンで、いつもながらこの大胆な展開は感心させられるが、古事記や日本書紀でおなじみの人物が、あまりにうまく中国古代史の記述と符合して戦いを繰り広げるところに、こうだと断定してしまっているのか、やや疑問も残る。小説ロマンとしてなら楽しくおもしろく読めるが、古代史考としての論述であるならば、もう少し脇を固める必要がある気がした。ただ中国など当時のアジア世界の関係を一步踏み込んで考えている点は評価される。

● 「渤海」(富山県) 5455号

「風景——イヌイットの皮袋——」(山口馨)は、老年を迎える主人公の透명한遠望感が、澄んだ結晶感を帯びていて、その底に奏でられる諦念のトーンが風景を美しく流している。孤独な遠望感のなかで出会う少年のみずみずしい話、限りなく物語が湧き出してくるイヌイットの皮袋の挿話に、その諦念が一つの再生としての輝きを帯びてきらめいてくるところに、この作品の読後感のよさがある。見ず知らずの少年との心の交わりの中にこそ天空への飛翔感が得られる。老いは老いとして衰えていくばかりではない、あるみずみずしいものへの融合への序曲でもあるような、美しいひらりを感じさせてくれる。山口馨氏は一貫してこのメインタイトルで連作を続けているが、その大きな意

図はまだ部分的にしか見えないものの、陰影の深い文章から紡ぎ出されてくる人間の世界は、雪国の白い世界に通じる純潔な視線が感じられる。一つ一つの作品として見るなら、55号の「後夜」より「イヌイットの皮袋」のほうが結晶感が強い。

「渤海」はどの作品も端正で、文章もかなり鍛えられている密度を感じる。着想も平凡ではなく、問題意識も高い。55号の「君子豹変——小林秀雄のこと——」(上

田千之)は、大胆にも小林秀雄という「昭和文壇の教祖」を戦争協力による犯罪性の立場から点検している。この果敢さは注目している。確かに小林秀雄は、戦争

中のことを振り返る時、歯切れが悪い。「僕は馬鹿だから反省などしない」という戦後の態度の転換を居直りでも表出する側面は、小林の弱点であると同時に日本の文化そのものの弱点でもある。論及の鋭さは確かに問題に一太刀浴びせている。しかしこれをやるなら、

もつと問題は大きく広がり、戦後の日本の文化の足場そのものにも論及していかねばならない問題の大きさを宿している。文化人の東京裁判を自らの手でやる覚悟が必要になる。そういう眼で見るとき、「真珠湾攻撃のとき、アメリカの空母はすべて出払っていた」程度の認識ではあまりにも足りない気がする。終戦の事情も把握が浅い。こういう理由からか、小林の晩年の作「本居宣長」への論及も深い所に及ばない歯痒さがある。一太刀は確かに浴びせたものの、深手にはなっていない。惜しまれる。

● 「ふくやま文学」(広島県) 200号

「魚の時間」(中山茅集子)は「プールの中を歩き始めた時から女は魚になる」という鮮やかな書き出し。随所に鮮烈なイメージ、切れのいい表現がある。「街を歩きながら、シヨウウィンドーに映る姿から抜け出してプールにやってくるのは、人ではない魚になるため。永遠に年をとらないという伝説の人魚になるため」

など、わかりやすく、詩的で豊かなイメージの膨らみがある。魚として浮かび上がる肉体のうちに、老いも、

水にまつわる傷の深い過去も、透明感を帯びて蘇ってくる。過去をも人生をも魚として泳ぎ生きるみずみずしい清涼感が、水面に揺れる波模様の重なりとなって命を映してくる。明晰なイメージの残る作品である。優秀作として多くの人に読んでもらう価値があると思う。

「ふくやま文学」は「月の骨」(北島去男)「火葬場から眺める」(鈴木富太郎)などイメージの豊かな作品が多い。詩も「源流から海へ」(伊藤伸太郎)などしつかりした彫拓感を伴っている。レベルが高い。

● 「カプリチオ」(東京都) 26号

「カプリチオ」はセンスのいい雑誌で、表紙やイラスト、レイアウトに都会的な瀟洒な雰囲気を感じられる。バーコードがついているのも珍しい。大きな書店で置いてくれそうな作りである。

「蜘蛛の部屋」(谷口葉子)は、出だしが秀逸だ。電車の向かいの席に掛けた老婆の紙袋から細い糸が揺れ、蜘蛛の存在に気がつく。降りるとき眠っている老婆からその蜘蛛を捕えて自分の部屋に連れて帰る。この鮮やかなシーンは物語に一気に引き込まれる。蜘蛛を部屋で飼いながら、主人公の孤独な生活が展開される。美容院の空疎な仕事。恋人との乖離。蜘蛛の生態を観察しながら、その上に心の深層を重ねていく。孤独感の中で獲物を捕えようとする蜘蛛の動きを見る眼差しは、不思議な透明感がある。蜘蛛の糸の網と空疎な生活がある空間を紡ぎ出すところに、この作品の深い楽音がある。蜘蛛が獲物を捕えるそこに主人公の殺意や破壊感につながる凄みも出せたかもしれないが、作者はそこまでは迫っていない。むしろ都会のモノクロの生活空間の渋い味が色濃い陰影を深めているところどどまっまっている。その瀟洒さが、少女のような感受性をひろげてもいる。逆にもう一つ何かを書き込めたかもしれないと物足りなさも残ることは残る。しかしいずれにしても、ここまで女性の都会での空疎でしかし何か美しい、味のあるモノトーンの生活空間



を造形した成果は賞場に値するだろう。

「鳩子」(万理)は命を救われた鳩が人間になって恩返しに来るストーリーだが、それぞれのユーモア溢れる個性が抽象的な直接性をもって動いているのがいい。この作者独特の手腕で、ここには何かがある。現代のやりきれなさに対するとぼけたあたたかみか匂っている。こういうものを造形する時の筆者の筆は、すでに完成されていて、こういったもので一つのまとまった本にしていい力量を備えている。新人賞とか華やかな賞は取りにくいかもしれないが、そういうものは気にしないで書き続けていけばいい。ここにある一つの味は、得難いものだし、作者でなければ表出できない世界をすでに形作っている。自分の味を大事にし、保持してしっかり膨らませていけば、いつか注目を浴びる時が来るかもしれない。自分の個性に自信を持って大切にしてほしい。

●「槐」(千葉豊) 25号

「それぞれの深紅」(遠野明子)は大腸癌からの母の死を見ながら、朝鮮から戻って来た自身の半生を重ね合わせて振り返るストーリーだが、淡々とした筆の下に、抑制され引き絞られた言葉の根がしっかりと地に食い込んでいる強さがある。この低いリズムがいい。それはある歴史を越えて生き抜いて来た強さに繋がっている。紅という口紅の色に、母や自分や周囲の女性たちに、女としての輝きや苦しみを重ねるところに、ある妖婉さが息づいている。ここにこの作品の主根がある。口紅が時を越え、歴史を越えてなお艶かしい光を見せる気配が、残影として揺れる。やや後半冗漫になって、幾分短くした方が引き締まったかとも思われるが、作品の到達点としての結果が感じられる。

●「火山地帯」(鹿児島泉) 153号

「火山地帯」も伝統の重みの感じられる誌で、鍛えられた密度がある。

「ウグナヤン」(園田信男)はフィリピンを舞台に、過去の戦争の傷跡と貧困を重ねて、ポランテアによ

る救済に希望の道を見出そうとする物語で、それなりにおもしろく読めるが、戦争の懐古とフィリピンの貧困の捉え方、切り込み方が浅くて、善意に流れてしまっている。戦争で日本軍はかなりのフィリピン人を殺している。戦争の現実、もっと生々しいものだと思ふ。私もこの方面での生き残りの元日本兵の方とバギオからポントックをいっしょに歩いたが、その凄惨さをもっと具体的なもので、この文章ではやや物足りないう。またフィリピンの人々の貧困の捉え方が紋切り型になっている。たしかにフィリピン人の人の良さ、明るさは日本人にはないものとして魅力的なものだが、逆に犯罪も多い。その貧困の構造をただ開発途上という視点だけで見ると助ける者と助けられる者との二つの立場しか見えて来ない。こうした見方に立脚しているところに、この作品の奥行きの高さを感じられてしまう。フィリピン人が生きた人間として立ち上がってこない。筆者の実直な人柄が偲ばれるだけに、小説の陰影にもう一つ深さが望まれる。

●「夜は笑う」(立石富生)

「夜は笑う」(立石富生)は、紡ぐような、回転する歯車のような文のつながりの強靱なリズムには一芸あるのを感じた。これはかなりの修練を積まないとできない文体で、蓄積の技量の高さを覚える。サラリーマンの会社の同僚の失踪事件を軸に展開する内面のドラマは読みごたえがある。最後まで読ませてしまう筆力は相当なもので、緊張した会話のやりとりの背後に潜ませる心理の深い剣劇は底に響いてくる鋭さがある。しかし、テーマの質があまりにありふれている。この心理の劇を真に生かすのは、材料に依存することを考え、単にサラリーマン世界での破壊ということに終わらず、もっと大きなテーマや素材を見つけてそれに向かつて緊張感が収斂していけば、この文章の力をさらに大きく生かせるだろう。文章は高度なレベルに達している、あとは材料の選択にかかっていると思ふ。

●今期の優秀作は以下の六篇である。

「風景——イヌイットの皮袋——」(山口馨「渤海」54号)。

「魚の時間」(中山茅集子「ふくやま文学」20号)

「蜘蛛の部屋」(谷口葉子)「カブリチオ」(26号)

「それぞれの深紅」(遠野明子)「槐」(25号)

「カプセル・タイム」(大西亮「北斗」548号)

「どくだみ」(波佐間義之「九州文学」524号)

準優秀作は、「鳩子」(万理)「カブリチオ」(26号)

「捜査二課」(棚橋鏡代「北斗」547号)「夜は笑う」(立石富生「火山地帯」153号)

●「文学界」の同人雑誌評が今年いっぱい打ち切られる。現在の純文学は同人雑誌を主な支持基盤としている。その層にそっぽを向かれて低迷が続いているのに、ここでもう判断ミスかその同人雑誌評を打ち切ってしまう。自分で自分の足を切ってしまうと同じだ。「文学界」のこれからの懸念されるが、結果として本格的な同人雑誌評をやっているのは「読書人」などごくわずかになってしまった。あらためて文芸思潮のこの欄にいつその重みがかかってくるのを覚える。文芸復興は、同人雑誌という基盤をおろそかにしては、真の果実は得られない。根を大事にして初めて花が咲き、実がなる。同人雑誌の再びの興隆の道こそが日本文学の再建につながることを確信している。

●第二回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」の最終候補作が出そろった。今号に載った「質状」(鈴木信

一「文芸東北」)「風景——イヌイットの皮袋——」(山口馨「渤海」)、「魚の時間」(中山茅集子「ふくやま文学」)

「蜘蛛の部屋」(谷口葉子)「カブリチオ」(「それぞれの深紅」(遠野明子)「槐」、それに先号に掲載された「セラピープロジェクト」(木戸順子)「弦」

「海辺の家」(近藤勲公「日田文学」)の七篇である。公開選考会は今年も八月九日の夏期合宿で行なわれる。日

帰りでもいい。積極的に参加して、自らの手で最優秀賞を決めてほしい。公開選考会での熱い討議が期待される。(全国同人雑誌振興会作家集団「槐」五十嵐勉)